

テーマ展「武家の備えー井伊家伝来の弓具ー」展示作品リスト

番号	指定	作品名称	数量	時代	備考
<b>◆弓ー放つー</b>					
1		あわせゆみ 合弓	1張	桃山時代	井伊家初代直政の所用と伝える。
2		あわせゆみ 合弓	1張	江戸時代	雪荷村吉田六左衛門元山と銘を彫る。
3		あわせゆみ 合弓	1張	江戸時代	大西早太の焼印を捺す。
4		あわせゆみ 合弓	1張	江戸時代	雁文の焼印を捺す。
5		くろぬりゆみ 黒塗弓	1張	江戸時代	吉田六左衛門元宣と銘を彫る。
6		しゅぬりゆみ 朱塗弓	1張	江戸時代	
7		しげとうゆみ 重藤弓	1張	江戸時代	
8		ゆみぶくろ 弓袋	1枚	江戸時代	
9		ゆみまき 弓巻	2枚	江戸時代	
<b>◆矢ー射るー</b>					
10		そや 征矢	5本	桃山時代	井伊家初代直政の所用と伝える。
11		かぶらや 鏑矢	2本	江戸時代	
12		まきはねや 巻羽矢	2本	江戸時代	
13		ふしかげの 節蔭篋	5本	江戸時代	
14		やね <small>ながね</small> 矢の根 (長根)	4本	江戸時代	清次郎の銘を刻む。
15		やね <small>ひらね かりまた</small> 矢の根 (平根、雁股)	6本	江戸時代	
16		やばね 矢羽	3組	江戸時代	
<b>◆携行具ー運ぶー</b>					
17		くろうるしぬりたあばないげたもんうんりゆうまきえつぽやなぐい 黒漆塗橋井桁紋雲龍蒔絵壺胡籛	1揃	江戸時代	
18		さかつらえびら 逆頬籠	1口	江戸時代	
19		たあばなもんちらしたけやづつ 橋紋散竹矢筒	1口	江戸時代	
20		くろぬりどひょううつぽ 黒塗土俵空穂	1口	江戸時代	
21		たあばなもんしらいうつぽ 橋紋白猪空穂	1口	江戸時代	
22		かごゆみ 籠弓	1式	江戸時代	
<b>◆装束ー装うー</b>					
23		ゆごて 弓籠手	2手	江戸時代後期	
24		ゆがけ 襪	3種	江戸時代	
25		きしゃがき 騎射笠	1頭	江戸時代	
26		きじお 雉子の尾	5枚	江戸時代	

※すべて彦根城博物館が所蔵する井伊家伝来の資料。

## 写真解説

\*番号は作品リストに則しています。

### 1 あわせゆみ 合弓 1張

総長 231.2cm

桃山時代

当館蔵（井伊家伝来資料）

本作は、弓の外側と内側に竹を貼り、側面には木材を寄せた合弓。内竹の下方には制作者が刻んだと思われる花押が見られます。各材が密着しており、内部構造は分かりませんが、側面のみを木材とする構造は、ひごゆみ 芯に竹を組み込んだ弓胎弓に通じます。また、桃山時代にも弓胎弓に準じた弓が考案されていたことが知られることから、本作も早い時期の弓胎弓である可能性が考えられます。この弓は、彦根藩井伊家初代の直政（1561～1602）の所用と伝え、井伊家伝来の弓の中でも一際太い1張です。



### 10 そや 征矢 5本

総長 80.3cm

桃山時代

当館蔵（井伊家伝来資料）

征矢とは、矢羽を3枚付けたみたて三立とし、やないぼ柳葉形やまきのほ槇葉形など、ながね長根と分類される細長く扁平な矢の根を付ける矢を指します。扁平な矢の根は、携行具に収めやすく、取り出しやすいため、戦場では征矢が主に用いられました。本作は、矢の根（やじり鏃）を欠失していますが、もともとは長根が付属していたのでしょう。矢の軸となる篋は煤竹で、矢羽と矢羽の間には、「井伊じじう（侍従）」と墨書が確認できます。この征矢は、彦根藩井伊家初代の直政所用と伝えるもので、直政が天正16年（1588）に侍従となって以降に用いたと考えられます。



くろうるしぬりたちばない げたまんうんりゆうまき え つばやなくい  
17 黒漆塗 橘 井桁紋雲 龍 蒔絵壺胡籜 1 揃

総高 90.0cm 胡籜高 37.6cm

江戸時代

当館蔵 (井伊家伝来資料)

壺胡籜は、古代に使用された靱<sup>ゆき</sup>と呼ばれる矢の携行具の流れを汲みます。壺胡籜は、平安時代になると、禁裏や天皇の警護を司る役所である衛府<sup>えふ</sup>に属する者が、儀礼などで束帯を着用する際に、威儀を示す道具として用いられるようになりました。本作の正面には、彦根藩井伊家の家紋である橘と井桁が金蒔絵で表され、壺胡籜に差された矢の筒には、「彦根中将」の墨書が見られます。井伊家4代の直興<sup>さきこんえふごんのちゆうじょう</sup> (1656~1717) が左近衛府権中將に就いて以降、ほとんどの当主が同じ官職に就いており、左近衛府権中將となった当主の中に、この壺胡籜を腰にして儀礼に参列した者がいたのでしょう。



ゆごて  
23 弓籠手 2手

袖丈 59.6cm (写真の弓籠手)

江戸時代

当館蔵 (井伊家伝来資料)

弓籠手は、射籠手とも呼ばれる騎射の際に着用する装束の1つです。弓を持つ弓手<sup>ゆんで</sup> (左手) の肩から手首までを覆い、矢を射る時に着物の袖が弓弦に当たるのを防ぐ役目を担っています。そのため、しっかりと固定できるように、袖口には指に懸ける環状の紐<sup>わな</sup> (縷) が、身頃の前面と背面には革製の緒が付けられています。

本作は、絹を織った艶<sup>つや</sup>のある朱色の生地に、彦根藩井伊家の家紋である丸に橘<sup>たちばなもん</sup> 紋と井桁<sup>いげたまん</sup> は金箔押しとし、さらに縞状に置かれた草花文は銀箔で表すなど、朱色に金銀の箔が映える華やかな1手です。このように所用者の家紋を弓籠手に示す形式は、室町時代に始まったと言われ、それが江戸時代の武家でも引き継がれていた様子が見えます。

